

地方都市における前衛美術運動の事例検討

—— “リーズ・アーツ・クラブ” の所産 ——

● 要 真理子・前田 茂*

はじめに

本稿は、これまで日本国内では詳細に紹介されることのなかった英国の前衛美術運動の一端を、特に「地方都市における前衛美術運動 (provincial avant-garde)」としての性格が強いリーズ・アーツ・クラブ (the Leeds Arts Club, 1903-1923) [図1] の活動ならびに思想の独自性を中心に明らかにすることを目的とした3カ年研究課題の中間報告である⁽¹⁾。本課題においては、この前衛美術運動と英国地方都市リーズとの関係を、政治学、文化行政学、教育学の側面も含めつつ分析し、首都ロンドンではなく一地方都市が美術教育と芸術文化振興において大きな役割を果たすようになった経緯を確認しつつある。加えて、この研究の成果を踏まえつつ、日本での芸術による地域振興ならびに芸術思想・教育の拠点育成に寄与する提言をまとめることも目指している。本報告では、これまでに入手した膨大な量の資料を整理してリーズ・アーツ・クラブの歴史的概略を示すこととする。



図1 リーズ・アーツ・クラブ標識

1. リーズ・アーツ・クラブ (LAC) の設立背景

英国の地方都市リーズは、しばしばロンドン、マンチェスター、バーミンガムに次ぐ英国第四の都市と言われており、都市圏の規模としては首都ロンドンの約18% (人口比) あるいは約28% (面積比) 程度に過ぎない。しかし、リーズ美術学校は、抽象彫刻を国際的に牽引したヘンリー・ムーア (Henry Moore, 1898-1986) やバーバラ・ヘップワース (Barbara Hepworth, 1903-1975)、またターナー賞を受賞した現代美術の代表的人物であるダミアン・ハースト (Damien Hirst, 1965-) を輩出し、またリーズ大学の歴代の美術史教授陣には、古くはハーバート・リード (Herbert Read, 1893-1968)、クエンティン・ベル (Quentin Bell, 1910-1996)、現在はグリゼルダ・ポロック (Griselda Pollock, 1949-) という錚々たるメンバーが名前を連ねている。もともとリーズ市を含むヨークシャー地方は、18世紀半ばに興った産業革命以降、石炭産業と羊毛・織物産業を背景に発展した地域であり、また1893年にはブラッドフォード市で独立労働党 (ILP) が結成されたこともあって、革新的な政治理念と先進的な美術実践が共存する土壌が用意されていた。実際、リードの伝記を書いたディヴィッド・シスルウッドの記述通り、「リーズはロンドンに次ぐ英国前衛美術運動の中心」(Thistlewood, 1984: 25) として認められている⁽²⁾。産業革命が一段落すると、リーズはすぐさま産業形態を一新し、今日でも金融・印刷・観光によって英国を代表する地方都市の一つとなるとともに、ヨークシャー地方もまた——「ヨークシャーなまり」や「ヨークシャー・マフィア」といった言い回しに代表されるように——ロンドンを中心とする英国文化とは一線を画する伝統を保っていると言われている。

多くの研究が検証しているように、英国の19世紀末から20世紀初頭は、首都ロンドンでアーツ & クラフツ運動に触発された知識人たちによる社会改革運動が興り、そこから貧困層に対して職工教育と職住近接環境を提供するトインビー・ホールに代表されるセツルメント運動が開始され、その対象を中流層にも拡張することによって田園都市の構想へと展開していった時期である。こうした時期、1903年に始動したリーズ・アーツ・クラブは、文字通り地方都市リーズを拠点とした文化運動であり、初期にはギルド社会主義の影響を受けていた⁽³⁾。その設立メンバーには、ILP やフェビアン協会などの革新思想に啓発された学校教師アルフレッド・オレイジ (Alfred Orage, 1873-1934)、『ギルド復興 (The Restoration of the Gilds)』の著者で建築家のアーサー・ジョセフ・ペンティ (A. J. Penty, 1875-1937)、そして文芸評論家ホルブルック・ジャクソン (Holbrook Jackson, 1874-1948)、さらには、ILP の創設者でフェミニズム活動家のイザベラ・フォード (Isabella Ford, 1855-1924) がいた。フォードはリーズで有数のクエイカー教徒の家系に生まれ、彼女の著書『門出 (On the Threshold)』(1895) は慣習的な男性性を厳しく批判したものだ。こうして、LAC にはフェミニズム思想も流入し、このクラブのなかでメアリー・ガウソープ (Mary Gawthorpe, 1881-1973) のような婦人参政権論者も育てていったのである。

上述のようなリーズの革新的な雰囲気の基盤形成においてとりわけ中心的な役割を果たしたのがオレイジであり、彼は1893年にリーズの学校に新任教師として着任して以降、ILP に積極的に関わるようになった。オレイジが社会的神秘主義者 (social mystic) でかつ同性愛者の権利擁護者として知られるエドワード・ポインター (Edward Poynter, 1836-1919) の弟子であったことから、ポインターは定期的に LAC で講演を行った。同じ頃、オレイジは、リーズに近接するブラッドフォード市の出版社から刊行された『想念形体 (Thought Forms)』(1901) の著者アニー・ベザント (Annie Besant, 1847-1933) が率いる神智学のサークルにも参加していた。先出のジャクソンによれば、LAC のプログラムは、「ニーチェ主義のリーズへの還元」であり、英国で最も早くニーチェの翻訳と解説をもたらしたのは LAC であった⁽⁴⁾。LAC の夜間の連続講演の中心テーマは、ウォルター・ペイター (Walter Pater, 1839-1894) の唯美主義とニーチェの超人思想を融合しようとしたものであり、それによると、人間は革新的な意識変革の一手手前まできているが、この変革を実現するためには、政治的手段に訴えるのではなく芸術によるべきだと考えられていた。労働者の運動はまさしく芸術による運動であるとされ、実際に1905年の講座プログラムを見ると、LAC のスタッフは芸術家や作家とともに英国北部全域を定期的に巡回し、そこで人々の声を聴き、討論をしていた。クラブに転機が訪れるのは、1905年にジョージ・バーナード・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) の講演が行われたときであった。ショーはそのとき、当時経営難にあったキリスト教社会主義の雑誌『The New Age』をオレイジとジャクソンが買収できるように力を貸し、その結果、前衛運動を首都にも拡大したいと願っていたオレイジはロンドンへと転居することとなる。

LAC の前半の活動を支えた中心人物がリーズを離れた後、この町を前衛美術運動の拠点へと展開する後押しをしたのが、1911年にリーズ大学副総長に着任したマイケル・サドラー (Michael Sadler, 1861-1943) であった。美術教育学者であったサドラーは、1910年代を通じてリーズ市美術館の学芸員として同時代の英国モダンアートを牽引した美術批評家フランク・ラッター (Frank Rutter, 1876-1937) とともに、LAC を主導し、先に紹介したような現代美術運動の中心地としてのリーズの地位を築いたと言える。

2. マイケル・サドラーの試み

英国の教育者・教育学者であり、大規模な美術品収集家でもあったサドラーは、1911年にリーズ大学の副総長に任命され、当時の英国では先駆的な教育改革を実践することとなる。リーズ大学は、その前身である1887年設立のヨークシャー・カレッジが、マンチェスターのオーウェン・カレッジやリヴァプール・カレッジと並んで第三のヴィクトリア大学（英国連邦大学）と呼ばれていた。1903年に3校が連盟を解消すると、マンチェスターとリヴァプールはそれぞれ独立した大学機関となった。あいにくリーズではヨークシャー・カレッジが大学として自立するために必要な地方自治体からの資金供与が不十分であったので、高度な技術教育のための教育機関を待ち望んでいた地元の職工たちが不本意ながらも不足分の資金を調達し、1904年にリーズ大学が誕生したのである。美術教育においてはすでに19世紀中頃から、ヘンリー・コール(Henry Cole, 1808-1882)らが中心となって立案された政策により、職工訓練のための国営の美術課程が各地方で開講されていたが、リーズ大学は工業専門学校と医薬系の研究所からなる完全に理工系学部から構成されていた。そこで、副総長として着任したサドラーは、人文学部を増設して大学を拡大し、総合大学となることを目指した。

サドラーの任命は市議会にとってはギャンブルだったと言われる。というのも、彼は先進的な教育学者として尊敬されていたにもかかわらず、リーズではよそ者であったし、社会的には無名であって、たしかに職工たちが待ち望んだ技術の専門家ではなかったからである。事実、リーズ大学に着任する以前の教育省におけるサドラーの英国教育改革案は、政治的に難渋させられてきた経緯があった。1902年の教育法の制定と、サドラーが提出した中等教育に関する地方自治体の詳細な調査報告書は、英国の教育に影響力を及ぼしたにもかかわらず、彼は長い間、政策決定権をもてなかった。絶望のなかでサドラーは妻メアリーの持参金を絵画収集につき込んだ。幸運にも、彼の妻は裕福なクエイカー教徒の家系の生まれであり、実家はリネン製造業を営んでいた。メアリーは失意のサドラーを優しく見守り、ヨーロッパの美術市場に没頭させた。ここから彼は、当時登場したばかりのゴーギャン(Paul Gauguin, 1848-1903)、ヴァン・ゴッホ(Vincent van Gogh, 1853-1890)、セザンヌ(Paul Cézanne, 1839-1906)を見出した。彼の趣味は、ジョン・セル・コットマン(John Sell Cotman, 1782-1842)やターナー(J. M. W. Turner, 1775-1851)やコンスタブル(John Constable, 1776-1837)のような英国の水彩画家からゴッホやセザンヌなどのポスト印象派まで幅広く、コレクションの大部分は画商や息子のマイケル(Michael Sadleir, 1888-1957)に指南されていたように見える⁽⁵⁾。息子のマイケルはロシアのヴァシリー・カンディンスキー(Wassily Kandinsky, 1866-1944)の作品を英国に紹介したことで知られる。

サドラーの過激な教育観はラグビーでの高校時代やオクスフォード大学トリニティ・カレッジの学生時代に培われた。ラグビーでは、彼はトーマス・アーノルド(Thomas Arnold, 1795-1842)の「ピューリタンの改革主義」の雰囲気にとっぷりと漬かっており、批判的な思考法や社会改革へ強い関心をもっていた。オクスフォードでは、トーマス・ヒル・グリーン(Thomas Hill Green, 1836-1882)の観念論とベンジャミン・ジョーウエット(Benjamin Jowett, 1817-1893)によってベリオール・カレッジから広まった社会奉仕の倫理の影響の下で学んだ。しかしそれ以上にサドラーに刺激を与えたのは、ジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)の美学や美術史、さらには政治経済学の講義であった。ラスキンの講義は彼にとって「言葉では言い表せないほど素晴らしい。泥中の蓮を見るようだった」とされる(Oliver, 1963: 5)。

ラスキンは、公的な健康と福祉と芸術的な生産と楽しみとの間を区別することを拒んだ。彼の思想は拡大する「労働者階級の運動」の指導者たちによって素早く吸収されていった。大学の公

開講座に参加したり、協同組合や労働組合の活動に献身したりしていた思慮深い労働者たちは皆、ラスキンが功利主義を批判し人道主義的経済学を唱えた著書『この最後の者にも (Unto This Last)』(1860)を手垢のつくほど読み込んでいたのである。当然ながら、ウェストライディング(1889年から1974年までのヨークシャー西部の行政区分名)におけるリーズとブラッドフォードのリベラルな新聞は、ラスキンの著作を公開したり、議論したりするのに多くの紙面を割いていた(Hardman, 1986: 118-123)。

大学を卒業するとサドラーもまた大学拡張運動に夢中になった。この運動は、1873年にケンブリッジのジョン・スチュワート・ミル(John Stewart Mill, 1806-1873)から始まり、じきに大学教育の恩恵を労働者へと拡大すべく「逍遙大学(peripatetic university)」のようなオクスフォードの活動に引き継がれた。大学拡張運動は、さらにはリチャード・ヘンリー・トーニー(R. H. Tawney, 1880-1962)やアレグザンダー・リンジー(Alexander Lindsay, 1879-1952)のような情熱的な理想主義者によって行われた。彼らは次の数十年にわたる教育改革の指導的発言者であった。サドラー自身が大学の公開講座で担当した授業のなかでも傑出していたのは「労働者階級の未来」に関してであり、この授業は、資本主義システムに関するマルクスの分析と、代案を提示していないとはいえ、完全に一致するものであった。サドラーは労働者のための高等教育を促進すべく1903年に設立された労働者教育協会(WEA)を歓迎していたし、加えて教育的に遅れている英国は他のヨーロッパ諸国の展開を学ばねばならないとも考えていた(Fieldhouse, 1996: 46-47)。彼は、産業革命以前の労働形態に霊的な喜びや誇りを見出そうとするラスキンのいささか前近代的な思想と、後にイタリア未来派の基底となる近代的なニーチェの思想の両方を併せ持っていたのである。

サドラーはオクスブリッジで推進された大学拡張運動を牽引した人物たちと接触し、多くの教授陣をリーズに招聘した。ただし先述の美術批評家のフランク・ラターは、一説にはサドラーの美術コレクションの質と量に魅力を感じて、リーズ市美術館の学芸員を引き受けたとも言われている。

3. サドラーとラターによるポスト印象派の展覧会

これまで、20世紀英国モダンアートの展開に対する大陸からの影響については、主にフランス・ポスト印象派を紹介したロジャー・フライ(Roger Fry, 1866-1934)と、このフライを指導者と仰いだブルームズベリー・グループを通じてのもの、とりわけ1910年にロンドンで開催された第1回ポスト印象派展が大きく取り上げられてきた。その一方で、LACは、1913年の展覧会において、ポスト印象派だけでなく、ヴァシリー・カンディンスキーをはじめとするドイツの20世紀初頭美術をも英国に紹介し、その造形理念に関してはフライと同レベルの高い理解を示していた(Thistlewood, 1984: 24-25)。

実際、1910年以降の『博物館ジャーナル(The Museum Journal)』に掲載されたリーズ市美術館の消息を通覧してみると⁽⁶⁾、1913年までのリーズ市美術館の展覧会は、地元の作家を中心とした自然主義的な絵画であったり、地域産業である印刷を題材にしたものが多かった。しかし、サドラーが魅力を感じたのは、カンディンスキーとLACの若きユダヤ人画家ジェイコブ・クレイマー(Jacob Kramer, 1892-1962)の二人の作品だった。サドラーは、彼らの作品が内奥のリアリティを表現していると確信し、これを「精神性(spirituality)」と呼んだ。息子のマイケルが購入したカンディンスキーの小品は、1911年にフランク・ラターが連合芸術家協会(Allied Artists Association)で展示したのもでもあった。ラターもまたカンディンスキーの無対象絵画の表現に

魅了されていたのである。マイケルは、カンディンスキーが1911年に著した理論書『芸術における精神的なもの (Über das Geistige in der Kunst)』を英訳し、翌年の12年に雑誌『Rhythm (リズム)』で発表した。加えて、彼は同時代のポスト印象派へと展開することとなった少なくとも二つの傾向——マイケルによれば、セザンヌやピカソの構築的な表現と、19世紀後半の象徴主義を起源としゴーギャンやカンディンスキーによって完成されたいっそう純粋な形態をもつ抽象表現——を区別した (Sadleir, 1914)。この二つ目の傾向こそ、サドラーが「spirituality」を見出した表現であって、LACはそれらから大いに刺激を受けたのだった。このような反応はロンドンを拠点とするロジャー・フライらの趣味とは極めて対照的であった。ロンドンでフライが組織した第一回ポスト印象派展でこそ、ゴッホ、ゴーギャンなど表現主義的な作風の絵画が目立ったが、こうした表現は次の二回展では退けられ、セザンヌやピカソなどマイケルが一つ目に挙げていた構築的な傾向が重視されたのである。ここに、リーズの前衛芸術の独自性が見出せる。

その一方で、1912年にリーズ市美術館に着任したフランク・ラターは、LACのメンバーのポスト印象派の芸術に対する関心と、ロンドンのオレイジ主催の雑誌『The New Age』のなかで発展しつつある新しい美術理論にも注目した⁽⁷⁾。この雑誌には、ウォルター・シッカート (Walter Sickert, 1860-1942) やウィンダム・ルイス (Wyndham Lewis, 1882-1957)、ジェイコブ・エプスタイン (Jacob Epstein, 1880-1959)、ゴードイエ・ブルゼスカ (Henri Gaudier-Brzeska, 1891-1915) などの芸術家が紹介されるばかりでなく、T・E・ヒューム (T. E. Hulme, 1883-1917) やエズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) などの詩人や哲学者や美術批評家も寄稿していた。『アルフレッド・オレイジとリーズ・アーツ・クラブ 1893年～1923年 (Alfred Orage and the Leeds Arts Club, 1893-1923)』(1990)の著者トム・スティールによれば、「老朽化した文化の腎臓に与えた夥しい数のキツイジャブ」といったようなヒュームのモダンアートに関する独創的な主張は、LACで入念に議論され、カンディンスキーの著作と双璧をなすものとみなされていたとされる⁽⁸⁾。ヒュームは、幾何学的な抽象を単なるロマン主義の末裔や精神的な表現というよりはむしろ古典主義に代わる新たなスタンダードと捉えていた。しかしながら、当のLACでは、若きハーバート・リードにおいてさえ、ロマン主義と古典主義は明確には区別されていなかった。リードとジェイコブ・クレイマーとの間でやりとりされた書簡からは、リードが相互に排斥し合うような急進的な考えよりも新旧の間の弁証法的な緊張関係を好んだことがわかる (Manson, 2006; Roberts, 1983)。こうした葛藤のなかで、1913年、先述の通りラターはリーズ市美術館でポスト印象派展を組織する。サドラーのコレクションからは、ゴーギャンの4作品とセザンヌ、ヴァン・ゴッホ、クレーの作品、そしてカンディンスキーの《Fragment 2 for Composition VII》が展覧され、ロンドンからは、カムデンタウン・グループのハロルド・ギルマン (Harold Gilman, 1876-1919)、チャールズ・ジンナー (Charles Ginner, 1878-1952) の作品が取り寄せられた。もちろん、ギルマンやジンナーもまた『The New Age』の熱心な読者であり、そこで繰り広げられるモダンアートの理論——ヒュームの論説やネオリアリズムの理論、そして「significant form」に関するラターの考え——を知っており、彼らの絵画表現はLACにおいても定期的に議論されたり、模写されたりしていた (Thistlewood, 1984: 25-26)。

4. 美術教育と前衛美術の拠点としての地方都市リーズへ

美術教育者としてサドラーは、こうしたポスト印象派展の恩恵を美術学部の学生やLACのメンバーにも享受させ、その結果リーズは前衛美術の拠点として成熟していくことになる。カンディンスキーがリーズのサドラーに送った作品のなかには、初期の無対象絵画も含まれており、サ

ドラーはそのうちのいくつかを大学や LAC で、学生たちや人々が現代美術の動向を知るためのいわば教材として展示した。興味深いことに、カンディンスキーもまた、彼自身の著作からも明らかのように、先述のアーニー・ベザントの神智学に強く影響されていた。カンディンスキーの言葉に従いつつ、サドラーは LAC のメンバーに絵画であれ音楽であれ自然主義的な再現に頼ることなく、自分自身を表現するように促した。さらに、サドラーは、自らのコレクションを学生とともに鑑賞することが教育者としての喜びであると考え、自宅に学生たちを招き入れて、彼らにヘンリー・ムーアを始めとする「サドラーが見た最初の印象派とポスト印象派」の作品を見せた (Oliver, 1989 : 17)。1932年にサドラーが出版した小冊子『モダンアートと革命 (Modern Art and Revolution)』においては、モダンアートに共感できない年配者に対してこれを歓迎する若者たちという世代間の反応のギャップに言及されており、このギャップにサドラーが期待する新時代の文化への変化の徴候を認めている (Sadler, 1932 : 12)。

他方、LAC では、とりわけ二人の若い画家が素晴らしい才能を開花させた。その一人が既述のジェイコブ・クレイマーであり、もう一人がブルース・ターナー (Bruce Turner, 1894-1963) であった。クレイマーはユダヤ系移民で、彼の家族は19世紀から20世紀転換期のユダヤ人迫害から逃れてきたウクライナからの亡命者であった。彼は1900年からリーズのユダヤ人コミュニティで成長し、LAC に入会するとすぐに頭角を現した。サドラーは彼のパトロンとなり、スレイド美術学校で学べるように経済的に支援した。クレイマーはウィンダム・ルイスのヴォーティシズムのグループと展覧会を行ったこともあるが、決してグループには加わらなかった。ハーバート・リードもまたクレイマーを高く評価し、彼をリーズのみならず「英国最大の表現主義画家」と呼んでいる。《贖罪の日 (The Day of Atonement)》(1919) [図 2] は、彼の最高傑作と言われている。



図2 クレイマー《贖罪の日》1919年

もう一人の重要な画家ブルース・ターナーと言え、今日では彼が抽象主義的な作品を制作していたことなどすっかり忘れられてしまっている。リーズの絹織物業で地元では有力者だったトム・ヘロン (Thomas Milner Heron, 1890-1983) は、ターナーの作品を収集し宣伝していた。ヘロンは彼の作品に熱中し、これらを「完全なるアヴァンギャルド」と評して、次のように述べた——「初期の作品におけるターナーは大胆で、知的で、徹底したプロ意識を示していた。私にはそれは1914年の英国では並ぶものがなかったと思える。ウィンダム・ルイスと比べると、ルイスは彼ほど絵画的ではなかった、ジンナーやギルマンは保守的過ぎた」(Heron, 1993 : 223)。不幸にも、ターナーは第一次世界大戦の間、反戦の意を根気強く唱えためにダートムアに収監され服役した結果、完全には復活できず、さらには彼の作品のほとんどが消失してしまった。ちなみに LAC の主要メンバーでもあったトム・ヘロンの息子パトリック (Patrick Heron, 1920-1999) は、後に画家として成功している。

リーズ大学出身者で LAC にも関わり理論家として最も活躍したのが、ハーバート・リードである。彼は、学部時代から実験的な美術や因習破壊的な考え方に馴染んでおり、後に LAC のニーチェ主義や他の大陸の哲学が彼の思想基盤を形成したとされる (Thistlewood, 1984 : 53)。ロンドンで、リードはエズラ・パウンドや T・S・エリオット (T. S. Eliot, 1888-1965) らのオレイジ

のサークルに参加し、『The New Age』の編集をオレイジから引き継いだ。シスルウッドが述べているように、LACを刺激したロマン主義か古典主義か（言い換えれば表現主義かフォーマリズムか）の2極の議論は、リード自身の美学的支柱となっているように見える（Thistlewood, 1984: 45-49）。リードは戦間期に、たとえば、ヘンリー・ムーアやバーバラ・ヘップワースといったヨークシャー出身の作家の彫刻をパブリックアートとして大衆が受け入れる素地を作った。リードの美術教育の基準は英国の美術学校においても受容され、第二次世界大戦後のリーズ大学では、エリック・テイラー（Eric Taylor, 1909-1999）の下で継承されている。1947年、リードはロンドンでもLACのような活動を試みようとしてローランド・ペンローズ（Roland Penrose, 1900-1984）とともに現代芸術研究所（ICA）を設立した。ICAは現在でもトラファルガー広場北側に君臨する伝統美術の殿堂であるナショナル・ギャラリーを広場南側から見据えながら健在ぶりを示している。

おわりに

本稿においては、研究課題のなかでとくにリーズにおけるモダンアートの展開について、首都ロンドンと異なる趣味——カンディンスキーの無対象絵画を始めとする表現主義的な傾向——をめぐる理論と実践に注目した。言い換えれば、ロンドンで展開したモダンアートのように抽象表現を造形として捉えるのではなく、「精神性」と捉えるところにリーズで育成された前衛美術の特徴があるように思われる。概して、ロンドンのブルームズベリー・グループを中心に展開した傾向をフランス趣味（francophile）、LACから始まる傾向をドイツ趣味（germanophile）と対比することもできよう。ただし、それぞれにおいて、内部で繰り広げられた議論は決して一枚岩ではなかった。一般に、『The New Age』でのモダンアート論争は、「リアリズム」を自然模倣の再現、すなわち対象重視の見方（写実主義）とするか、あるいは新しい世界の表現、すなわち作品重視の見方（実在論）とするかのいずれかで揺れてきたと言われてきた（Thistlewood, 1984: 42）。しかしながら、本調査を通して見えてきたのは、『The New Age』に感化されていたかに見えるLACにおいてさえ、こうした二項対立がそれほど明確化されてはいなかったということである。このことは、本論で確認したように、LACの思想的基盤であるニーチェ主義や神智学の影響と無関係ではないだろう。その一方で、本課題を調査するなかで、クエーカー教徒と芸術文化および教育とのコネクションが浮かび上がってきた〔図3〕。英国の近代化が工業化と資本形成と結びついている以上、この近代化に貢献した富裕層にクエーカー教徒が多かったという事実、さらにはこの近代化によって生じた諸問題に積極的に関与した彼らのフィランソロピ的な活動は無視できない。これまで、クエーカー教徒がモダンアートに関して果たした役割は、日本のみならず英国本土における先行研究でもほとんど注目されてこなかった。



図3 旧クエーカー教徒の礼拝堂

もう一つの課題として残されているのは、リーズの芸術・文化政策を英国全体、さらには英米圏全体の文脈の中で検討することである。地方都市リーズと首都ロンドンは相互に遠く離れた地域であるとしても、人的には常に密接に結びついており、主導者たちはこの二つの地域を行き来していた。リーズが輩出した逸材をロンドンへ受け入れ、受け入れられた人物がさらに力を蓄えて、

今度は教育者・支援者としてリーズに再来する。こうした地方都市と首都ならびに他の地域との人的循環と文化的連関の検討を通じて日本の文化政策に寄与する一つのモデルケースを構築することを次年度の課題としたい。

注

- (1) 類似の関心からの先行研究としては、cf. Neal Alexander & James Moran (eds.), *Regional Modernisms*, Edinburgh University Press, 2013.
- (2) David Thistlewood, *Herbert Read*, Routledge Kegan & Paul, 1984.
- (3) Tom Steele, *Alfred Orage and The Leeds Arts Club*, Scholar Press, 1990.
- (4) 1906年から翌年にかけてオレイジはニーチェに関連する図書を3冊出版しており、その中にはニーチェのアフォリズムのいくつかを英訳したのも含まれている——Orage, *Friedrich Nietzsche: the Dionysian Spirit of the Age*, T. N. Foulis, 1906; *Consciousness: Animal, Human and Superman*, Theosophical Publishing Society, 1907; *Nietzsche in Outline & Aphorism*, T. N. Foulis, 1907.
- (5) 同じ「サドラー」の発音にも関わらず父子で綴りが異なる(父=Sadler, 息子=Sadleir)のは、1940年に息子が出版した小説(ヴィクトリア時代のロンドンの売春をテーマにしたもの)によって巻き起こったスキャンダルによるとされている。
- (6) *The Museums Journal*, ed. by F. R. Rowley (1909–1914); W. R. Butterfield (1914–), The Organ of the Museums Association. このほか、図書館ならびに博物館の運営に関する以下のリーズ市議会報告書も参照した: City of Leeds Public Libraries Annual Report, 1910–1911; City of Leeds Public Libraries Annual Report, 1911–1912; City of Leeds Public Libraries and Art Gallery Annual Report of the Libraries and Art Committee, 1912–1913; City of Leeds Public Libraries and Art Gallery Annual Report of the Libraries and Art Committee, 1913–14; City of Leeds Libraries and Arts Committee Annual Report, 1914–15; City of Leeds Libraries and Arts Committee Annual Report, 1915–16; City of Leeds Libraries and Arts Committee Annual Report, 1916–17; City of Leeds Annual Report of the Libraries & Arts Committee, 1918; City of Leeds Annual Report of the Libraries & Arts Committee, 1919; City of Leeds Annual Report of the Libraries & Arts Committee, 1920. これらはすべて2016年夏の海外調査で閲覧することができたものである。
- (7) Cf. Frank Rutter, *Since I Was Twenty-Five*, London: Constable & Co. Ltd, 1927.
- (8) 2015年夏の海外調査では、リーズ大学附属スタンリー&オードリー・バートン・ギャラリーにて、著者のトム・スティール氏にお会いし、日本人には実感することの困難なヨークシャー地方の文化的独自性、リーズとブラッドフォードなど近郊都市との関係、またリーズ・アーツ・クラブと神智学ならびにクエーカー教徒との関係など、著作では詳細が不明だった点についてお話を伺うことができた。

図版リスト

- [1] リーズ・アーツ・クラブの標識。その後しばらくは建物を書店が使用していたが2015年8月では改装中。
- [2] ジェイコブ・クレイマー《贖罪の日》1919年、インクと鉛筆、61.5×90cm、リーズ市美術館蔵。
- [3] リーズ市街地からリーズ大学へ至る途上にある旧クエーカー教徒の礼拝堂。

参考文献:

Alred, Nanette (2007), 'A sufficient flow of vital ideas: Herbert Read and the flow of ideas from the Leeds

- Arts Club to the ICA', in Michael Paraskos, *ReReading Read: new views on Herbert Read*, London: Freedom Press, pp. 76–87.
- Beresford, Maurice (1989), *Notes for a lecture on Sir Michael Sadler*, delivered in the University of Leeds on 28 April 1989 by Emeritus Professor M.W. Beresford, Brotherton Library Special Collections, University of Leeds.
- Carswell, John (1978), *Lives and Letters: A. R. Orage, Beatrice Hastings, Katherine Mansfield, John Middleton Murry, & S. S. Kotliansky, 1906–1957*, London: Faber & Faber.
- Diaper, Hilary ed. (1989), *Michael Sadler*, Leeds: Leeds University ArtGallery.
- Fieldhouse, Roger and associates (1996), *A History of Modern British Adult Education*. Leicester: NIACE.
- Gosden, Peter (1989), 'Sir Michael Sadler, Educationalist and Vice-Chancellor' in *Michael Sadler*, ed. Hilary Diaper, Leeds: Leeds University ArtGallery, pp. 9–16.
- Hardman, Malcolm (1986), *Ruskin and Bradford*, Manchester: Manchester University Press.
- Heron, Patrick and Read, Benedict (1993), 'A conversation between Patrick Heron and Benedict Read' in Read and Thistlewood (eds.) *Herbert Read: a British Vision of World art*, Leeds: Leeds City Art Galleries in association with the Henry Moore Foundation and Lund Humphries, London.
- Higginson, J. H. (1994), 'Michael Ernest Sadler', in *Prospects*, vol. 24, no. 3/4, 1994, pp. 455–469.
- Hyatt, Derek (1994), *Eric Taylor a retrospective*, Leeds: Leeds University ArtGallery
- Jepson, N. A. (1973), *The Beginnings of English University Adult Education—Policy and Problems*, London: Michael Joseph.
- Lindsay, A. D. (1925), Preface to *Karl Marx's Capital: An Introductory Essay*, London: Oxford University Press.
- Lowe, Roy (2007), 'Sadler, Sir Michael (1861–1943)', Oxford Dictionary of National Biography, Oxford: Oxford University Press, online edition [2017年1月18日確認].
- Mairet, Philip (1936), *A. R. Orage*, London: J. M. Dent & Sons.
- Manson, David (2006), *Jacob Kramer Creativity and Loss*, Bristol: Sansom and Company Ltd.
- Martin, Wallace (1967), *The New Age under Orage: Chapters in English Cultural History*, Manchester: Manchester University Press, New York: Barnes & Noble.
- Oliver, Bill (1963), Introduction to catalogue of the Commemorative Exhibition of Sir Michael Sadler's Collection, Leeds: Leeds City Art Galleries.
- Oliver, W. T. (1989), 'Sadler as Art Collector' in *Michael Sadler*, ed. Hilary Diaper, Leeds: Leeds University ArtGallery, pp. 17–22.
- Paraskos, Michael (1993), Herbert Read and Leeds in *Herbert Read A British Vision of World Art*, Leeds: Leeds City Art Galleries, pp. 25–35.
- Paraskos, Michael ed. (2007), *ReReading Read: New Views on Herbert Read*, London: Freedom Press.
- Pease, Edward R. (1916), *The History of the Fabian Society*, London: A. C. Fifield.
- Read, Benedict and Thistlewood, David (1993), *Herbert Read a British Vision of World Art*, Leeds: Leeds City Art Galleries.
- Roberts, John (1983), *The Kramer Documents*, Valencia: John Roberts.
- Sadleir, Michael (1949), *Michael Ernest Sadler a Memoir by his Son*, London: Constable.
- Sadler, M.T.H. (1914), translator's introduction in Kandinsky, Wassily (1914) *The Art of Spiritual Harmony*, translated by M T H Sadler (Michael Sadleir) London: Constable.

Sadler, Michael (1913), typescript notes for a talk 'Reminiscences of Arnold Toynbee and Ruskin' read to a WEA audience at Leeds University 18 October 1913, in Sir Michael Sadler Paper, Accession no. 252, Bodleian Library, University of Oxford.

Sadler, Michael (1932), *Modern Art and Revolution*, London : Hogarth Press.

Steele, Tom (1990), *Alfred Orage and the Leeds Arts Club 1893-1923*, Basingstoke : Scholar Press.

Taylor, Gary (2000), *Orage and The New Age*, Sheffield : Sheffield Hallam University.

Thistlewood, David (1984), *Herbert Read Formlessness and Form*, London : Routledge, Kegan Paul.

本論文は、日本学術振興会科学研究費補助金採択課題「英国地方都市における前衛美術運動——リーズ・アーツ・クラブの軌跡」(基盤研究(C) 課題番号:15K02175)の研究成果発表の一環として公開する。また、使用した写真は全て、本補助金による海外調査において著者らが撮影したものである。

*京都精華大学人文学部